

STORY 00 |

毎月22日は#ふうふの日



2025.04.22

僕の大事なあさんは、

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
MELT SMOOTH SHAMPOO

メルト スムース シャンプー



うねり髪も
とろけるようなさらツヤ髪へ



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

僕の大事なハアさんは、

「ねえ、髪やって？」

新年度がはじまって、数週間。

僕の大事なハアさんは、慣れない仕事にちよっぴりお疲れ気味。ときどきドライヤーを手に、僕のもとにやってくる。

ハアさんは髪が長くて多いから、濡れた髪を乾かすのが億劫でたまらないそうだ。

確かに毎日は大変だよな。僕はたまにだからいいけれど、と思い

「大変だから短くしたら？」とはハアさんの髪を乾かしながら言うとうとうとしていたハアさんが、突然バツと振り返り

「……もういい」と、自分で髪を乾かしはじめた。

心配になり、様子を見てみると、髪を乾かし終えたハアさんが、もう一度振り返ってこう言った。

「私はくせつ毛でうねりも気になるし。長さがないと、ふわってなるの」と。

訳も分からず、僕が首を傾げると、ハアさんは続けて、

「……大変だったよね。ごめん」と言って、ひとりで寝てしまった。

……違う、そうじゃない。

なんとか誤解を解かねば、とスマホと格闘すること数時間。

メルト、というシャンプーを見つけた。

ハアさんみたいに、髪のうねりが気になる人にいいらしい。

明日、これを渡して伝えよう。

「髪を乾かすのは全然嫌じゃない。

僕はただ、ハアさんにラクになってほしかっただけなんだ」と。

STORY 002

毎月22日は#ふうふの日



2025.05.22

わが娘、最強説

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
BIOREUV WATERY HOLD CREAM

ビオレ 水肌記憶UV



水を抱えた膜で 夕方まで
みずみずしさつづく 日やけ止め



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

わが娘、最強説

ある土曜の昼。

妻がリビングで写真を広げていた。

妻と娘で行った沖縄旅行の写真のようだ。

ずいぶん味がある写真だ、と思っていると

横にフィルムカメラがおかれていることに気がついた。

「今どき珍しいな」と声をかけると

「彩夏が撮ったのよ。高校で流行っているみたい。

これが逆にエモいつて」

と妻は娘の口調を真似して答えた。

何枚か手に取り見ていると、最後の一枚で手が止まった。

妻がそれに気がつき、私の手元をのぞき込むと

「これは、最後に一枚余って」と焦って写真を取り上げた。

少し見切れた娘と驚いた顔の妻の写真だった。

「いいじゃないか」と言う

「嫌よ。あの子、突然撮るから。変な顔だもの」と妻は言う。

「そうか？いつも通りだぞ」と返事すると

妻は言いかけた言葉を一度飲み込んで

「……あなたにはもう二度と見せない」

と写真を片付け、ひとりで出かけてしまった。

娘に相談すると

「ありえない。パパが10000%悪い」と強めにどやされた。

そして「迅速な謝罪とビオレ水肌記憶UVの献上を」と言うのだ。

「それで許してくれるか？」と聞くと

「それだけじゃ無理。どんなママも好き、って言うまでがセット」
との確に指南された。

父が戸惑うほど、わが娘、最強である。

STORY 003

毎月22日は#ふうふの日



2025.06.22

おしゃべりなスニーカー

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
WIDE HIGHTER PRO

ワイドハイター PRO 粉末



つけおき洗いで
しみこんだ汚れもスッキリ



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

おしゃべりなスニーカー

玄関の隅で、スニーカーたちは、少し疲れた顔をして並んでいた。二人で選んだ白いスニーカーが、くすんで汚れている。

「最近お出かけしてないね」

「ずっと出番を待ってる」

和也はスニーカーたちからそんな声が聞こえた気がした。

一念発起して、粉のワイドハイターでつけおきしてみると、みるみる白さが蘇ってきた。

「僕も早く散歩したいよ」和也はスニーカーに微笑みかけた。

週末、和也はパートナーと洗いたての白いスニーカーを履いて出かけた。スニーカーたちは久しぶりの外出にはしゃいだ。

「角に素敵なお店ができたね」

「川原にあじさいが咲いてるね」

並んで歩くふたりの足元で、スニーカーたちは楽しくおしゃべりを始めた。

「また一緒に歩けるなんて最高だね」

「これからもずっとこうしていたいな」

久しぶりの冒険に足取りは軽くなった。梅雨の晴れ間の町に、二足のステップは永遠に続くダンスのように弾んだ。

帰宅後、彼女は和也に微笑みかけて言った。

「ぴかぴかのスニーカーで、楽しかった。ありがとう」

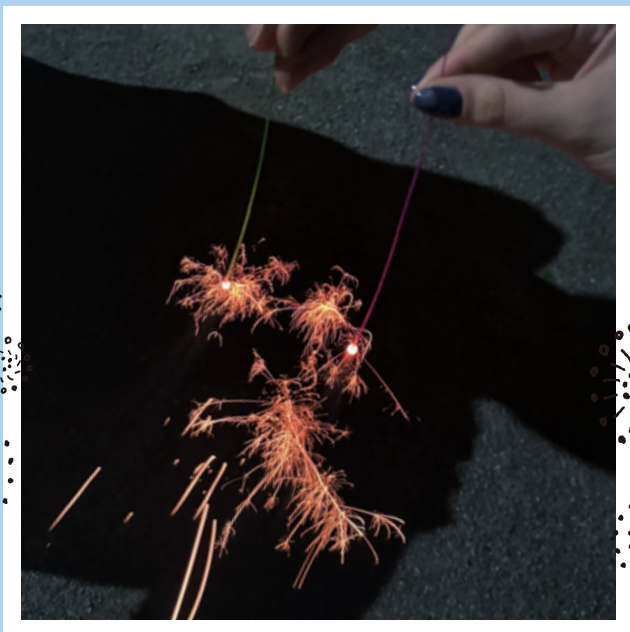
「このところ忙しかったから。二人の時間を作りたくて。そしたら二人のスニーカーをきれいにしたくなったんだ」和也は照れた。

「僕も楽しかったよ。また並んで歩こう」

二足のスニーカーも玄関に並んで、にこにこ笑っているようだった。

STORY 004

毎月22日は#ふうふの日



2025.07.22

牡丹星が照らしたもの

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
BIORE ZERO SHEET

ビオレZeroシート



1枚で全身
快適をまとめて、ずーっとさらさら



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

牡丹星が照らしたもの

会話のないリビングで、黙々とネイルをする妻のナツミ。紺地に白で描かれた繊細な模様は、いつかの花火のようだった。――毎年行く約束だったけど、去年は行かなかったもんな。僕は心の中で呟いた。

数日後、花火大会のチラシを持ち帰った。

「今年で二人とも三十歳だし、記念に」

それを見たナツミは僕に、なんか思ってるなら言っ、と。

「今でも花火、好きなんですよ？」

そう伝えると、ナツミは少し目を伏せて、どこか囁みしめるように頷いた。

二年前の冬、ナツミの耳が聞こえなくなってから、コミュニケーションが取りづらくなり、少し距離を感じていた。だからこそ、何でもいいから前に進むきっかけが欲しかった。

七月二十四日、花火大会当日。

二人の下駄が高鳴る中、僕が暑さを隠せずにいると、

「私は浴衣着る前に、ビオレのシート使ったし、さらさら」

と、ナツミは自慢げに首元を撫でてみせた。その時、夜空に大きな牡丹星が咲いた。

最後の花火が打ち上がると、人混みからそっと離れるように歩いた。そして河川敷の隅に腰掛け、袂から線香花火を取り出した。

「去年の花火、今から」

僕の拙い手話にナツミは相好を崩した。

白い牡丹が描かれた指先で、そっと目頭を拭いながら。

STORY 005

毎月22日は#ふうふの日



2025.08.22

あわい おもい あい

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
PUREORA

ピュオーラ 炭酸ハミガキ

kao
花王製品が
お手伝い



※
たっぷりの炭酸泡が
お口すみずみ洗浄

※水に触れると重曹とクエン酸が反応

医薬部外品 販売名：ピュオーラ ZKa 歯周病(歯肉炎・歯周炎)・むし歯・口臭予防



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

あわい おもい あい

薄暗い洗面所の明かりを点ける。
しょんぼりとした顔の男が、鏡に映っていた。

二日前、妻と喧嘩をした。…一方的に。

連日の猛暑で、水泳の授業は中止。
夏休みにも関わらずゲーム三昧な息子を見かねた妻が
「甘いものでも食べにいこっか」と誘ったのが始まりだった。

目の前に並ぶ色鮮やかなクリームソーダ。
「冷たい!」頬を押さえて笑う息子に頷きながら、俺も一口。
夏らしくキンと冷えた味に思わず顔をしかめると、
「そういえばこの前、歯ぐきが気になるって言ってなかったっけ?
大丈夫?」と妻。

昔から何かと気が利く妻。

でもこの時ばかりは、踊っていた心がピタリと止まり、ムツとした。
「冷たかっただけ。関係ないよ」
想像以上に棘のある声が出て、アツと思ったのも時すでに遅し。
一瞬悲しい顔を浮かべた妻は、息子に向き直ってしまった。
そのあとの味は、よく覚えていない。

そんな空気のまま、今朝。
ため息を吐き洗面鏡を開けると、炭酸ハミガキと書かれた商品が
置かれていた。
赤い「歯周病予防」の文字に、妻の優しさだと一目でわかった。

―起きてきたら謝ろう。それから…
クリームソーダのように弾ける泡を口の中で感じながら、溢れる
妻への言葉を探し続けた。

STORY 006

毎月22日は#ふうふの日



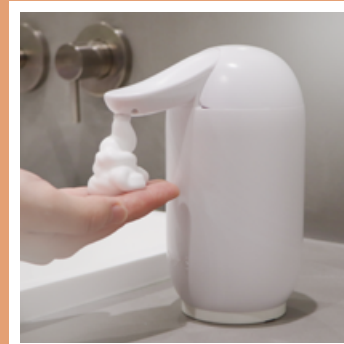
2025.09.22

10分の、朝散歩

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY BIORE

ビオレu 自動で出る
泡ハンドソープ ディispenser



ビオレu 泡ハンドソープ
金木犀の香りをつめかえて使える

医薬部外品 殺菌・消毒 販売名：ビオレu Hg-k



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

10分の、朝散歩

この数年、エンジニアの夫は在宅勤務がメインになった。

若い頃は一週間出張、なんてザラだったけれど、こんなに家にいるようになるなんて。嬉しくもあり違和感もあり。

「体を動かさないから、腰が痛いよ」と言うので、毎朝10分、二人で散歩をすることにした。

たった10分、されど10分。

朝日がまぶしかったり、雨が心地よかったり。

この前は、金木犀の香りがふわっと漂ってきた。周りを見回すと、軒先に見事に咲いている。

「見て、秋だねえ。いい香りっ」と言うと、「おお本当だ」と一言。

：季節に興味がないんだか、私の話に興味がないんだか。

一緒に暮らして二十年経つけれど、まだ何を考えているのか、わからない時もある。

数日後。

久しぶりに出社した夫が、ビオレのハンドソープを買ってきた。手をかざすと泡が自動で出てくる。金木犀の香りだった。

「これ、高かったんじゃない？」

「機械っぽくない形がいいなと思って。

香りも好きそうなのを選んだんだ」

「私の話、聞いてはいるのね？」と笑うと

「もちろん」と、調子のいい返事。

ハンドソープで手を洗い、香りが鼻に届くたび、なんてことないやり取りを思い出すようになった。

STORY 007

毎月22日は#ふうふの日



2025.10.22

わかってないおばけ

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY BUB

バブ モンスターバブル
よくばりミルクィー



※1
ミルクィーなのに強炭酸
※2
回復系ミルクィー

※1 勢いよく発泡すること ※2 疲労回復

医薬部外品 温浴効果を高めて、疲労回復。販売名：バブ Sa1



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

わかってないおばけ

金曜日。街はハロウィンに浮かれている。

つい仕事に没頭してしまった私は、早く帰ってお風呂に浸かりたい一心で家に向かう。

玄関を開けると、まさにお風呂へ向かう夫と目が合った。

「おかえり。あ、さっと入っちゃうから、ちょっと待ってて！」

そういう問題じゃないし。今すぐ入りたかったのに。

お風呂という至福を、私がどれだけ心待ちにしていたか。

まったくわかってない…。

「あがったよー」

呑気なその言葉で、まどろみから覚める。全身はまだぬくぬくとした眠りの中。目を閉じたまま「うーん」とうなる私に、何も言わずに立ち去った。

と思つたら、少し経ってバタバタと戻ってきた。

「今バブ入れてきた。ミルキーなのに強炭酸なんだって。疲れ回復にいいらしい」

ふて寝だと気づいてるくせに、めげずに続ける。

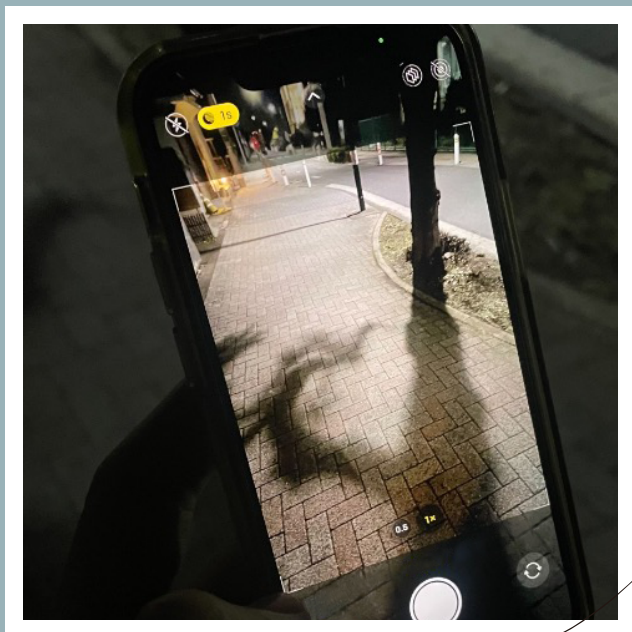
「あがったらアイスもあるよ。ハロウィンだから特別に高いやつ買っといたんだ。あとで一緒に食べよ」

…仕方ない入るか。うつすら目を開けると、白いタオルを被ったおばけが、こちらを見降ろしていた。思わずふふっと笑ってしまう。あーもう。ニヤついたのを髪でごまかして、気だるそうにリビングを出る。

まったく、私の機嫌の取り方だけはわかってるんだから。

STORY 008

11月22日は#いいふうふの日



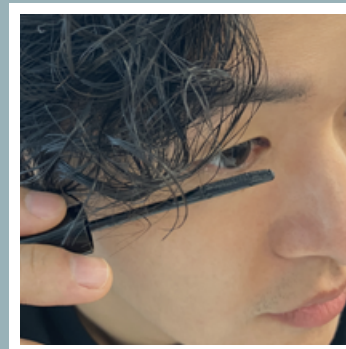
2025.11.22

小さい冬、みつけた

CREATED BY KAO_SAKUSEICENTER

ASSISTED BY
CAPE MASCARA BASE

ケープ カールロック マスカラ下地



夜までカールをロック
これ1本で自然に盛れる



ふうふのショートストーリー
My Kaoで毎月更新中

小さい冬、みつけた

「あ、冬のおいがする」
「ほんとだ、いつの間に」

仕事終わり、家までの帰り道。月明かりに照らされながら、二人並んで空気をかぐ。鼻の奥にくる、少し燻されたような、巡る季節のにおい。

「この間まで金木犀だったのに」
「冬ってせつがちだなあ」
「もっとゆっくり来てくれていいのに」

私の好きな人は、小さな季節の変化を捉えられる人だ。季節だけでなく、人の変化にも、すぐに気づく。今日もふと顔を覗き込んで聞いてくる。

「あれ？メイク変えた？」
「いや、マスカラ下地だけ塗ってる。よくわかったね」

「目がくつきり見える気がして」
「さりげなく盛れるんだよね、これ。しかもあのケープから出てるんよ」

まさかだよねえ、しかし君の観察力は流石だな、と笑っていると、目の前に現れた街路樹を見て思い出した。
「ねえ、そいえばあの木、葉っぱがなくなって影がハート形に見えるようになったの、知ってた？」
「えっ、どれ」

ほんとだ、冬支度だねえ、と写真を撮る横顔を見て思う。世界の小さな変化に気づいたとき、伝えたいと思える相手がいる。それって当たり前じゃなくて、幸せで尊いことだよな、と。急に胸がぎゅっと熱くなる。髪を払うふりをして、そっと目尻を拭いた。